

中世におけるギリシア語とラテン語の問題

兼 岩 正 夫

一、中世のギリシア語

西洋中世は *Latinitas* の世界でギリシア的要素は稀薄と言われる。然しドーソンも言うように東方から絶えず新思想を移入した *open-mindedness* はラテン世界の特色で、

初期の Rufinus, Hieronymus 等のギリシア神學受容、中期 Pseudo-Dionysius の影響、後期のスペイン・南伊翻譯者の活動等、中世界想史へのギリシア的東方の意義は少くない。

5。西歐のギリシア語知識は四・五世紀既に衰亡に瀕し、八世紀頃までに殆んど消滅したと言われる。アウグスティヌスもギリシア語を學んでは居るが自らギリシア語はあま

り知らぬと告白して居るし (Contra Ith. Petil. II, XXXVIII, 91; de Trin. III, 1, 1) エヒロニムスも東方へ行く迄ギリシア語を知らなかつた。三七六年にウァレンスとウァレンチニアヌス兩皇帝がトリエルにギリシア語の教師を任命する権限をガリア太守に與えた勅令には「その職に堪える人が見出されば」と附言されている。(Codex Theodosianus XIII, 3, 11) アムブロシウス作と誤り傳えられた Ambrosiaster (四世紀後半) には “*multestum est ignotum, rare minimum nostrum, si lingua loquatur, quam nescit, sicut adolecent Latini homines Graece cantare, oblectari sono verborum, nescientes tamen quid dicant*” といふ暗示的な句がある。もつとも Ansonius は屢々ギリシア語教師に言及し *Minervius, Arborius* 等はロムスタンチノー

ブルへ遊學している。ボルドーやガリア・ナルボネンシスの大都市では東方との通商で六世紀までもギリシア語が語られ、南伊にもラング・パールとしてのギリシア語はあつた。然しガリアの修道院ではギリシア語は學ばれなかつた。アリストテレスを譯したボエティウスの如き全く例外的存在であつたと言われる。^①

①中世のギリシア思想の傳承にとりボエティウスの意義は決定的である。Cassiodorus も Emmodius もボエティウスのギリシア語知識の深いのを賞讃している。彼はアリストテレスの全作品を譯し註釋し、プラトンの對語篇も同様譯して註をつける。フランを持つたが、結局アリストテレスの *Categoriae* と *De Interpretatione* を譯し、前者に二つ後者に二つの註をつけ *Porphyrus* の *Isagoge* を譯しこれにも自分の譯と *Victorinus* の譯とに二つずつ註釋をつけたに留つた。 *Analytica* と *Topica* の譯は散逸したと思われる。中世盛期に至るまで西洋のアリストテレス知識はボエティウスに依存したのである。

中世前半ギリシア知識を保持した所は大陸でなく島國アイerlandであつたと言ひ。当時ギリシア語を知る者は、

中世におけるギリシア語とラテン語の問題(兼岩)

Scotti と言われた程である。七世紀大陸で學藝の沈滞が甚しかつた頃 *Columbanus* も *Iona* の修道院長 *Admann* も、その叙述に屢々ギリシア語を引用して居る。アイerland修道院はラテン語とギリシア語を混用して、*Panteg's solitum elaborant agrestes 'origan'* と言ふ様な面白い文章を書いた。アイerlandの影響を受けたイングランドでも *Beda* の如き晩年には略々ギリシア語に通曉したと。

②もうとも *Mantius* 等はアイerlandのギリシア語を重視しない。六・七世紀のアイerlandの寫本には屢々ギリシア語が見えるが、これもアイerland人がギリシア語の *lossarium* を有しその中から二三の語を乏しい故に却つて派手に使用したのである。アイerlandで規則的にギリシア語の學習が行われたとは思えぬ。*Columbanus* もギリシア語を知つたと言えぬと。 *H. Steinbecker* によればアイerlandのギリシア語は法王 *ローバ* に建てた *Friechenkolonie* より來たと。 *Mantius* はアイerlandのギリシア語は、ギリシア人たる *Theodor* と *Hadian* が *カシタペリ* へ赴任してギリシア知識を傳えたのが移つたのだと言ふ。

八九世紀におけるルネッサンス・カ罗兰ジャンヌのギリシア知識に就いて初めて根據ある研究をしたのは中世ラテン語學の創立者 I. Trabe で彼によれば、「中世前半のギリシア語學徒はアイルランド人だけで Graeca の存在はアイルランドのものかその影響によるもの」と。此の見解は大體今日も是認されているようだ。大陸の修道院でもアイルランドの影響のある所では scriptorium の中にギリシア語を書く寫字生が居り祈禱文がラテン・ギリシア兩語で行われて居る。特に St. Gall にはかなりギリシア語が知られていた。もつともこゝに Elenici fratres と言われるギリシア語に熟達せる修道僧の一團が居たとの説は信ぜられぬ模様。ギリシア語の二三の文句をラテン文に挿む程度の方はかなりいたろうが、とに角 Greek scholars と言ふ得る者は Johannes Scottus と Anastasius の二人に留まると言われる。^③

Aleuin & Greek scholars と言われる事があるが彼のギリシア語は、すべて他の著者からのそのまゝの引用である。

③ Johannes Scottus は Pseudo-Dionysius の "Caelastica hierarchia" 及び Abt. Maximus の Ambigua を譯した。彼はギリシア語よりのラテン譯をもう一つやうに言われる。彼には又ギリシア語作品の拔萃もあるしギリシア語の詩作も行つた。Anastasius Bibliothecarius は Johannes Scottus の Pseudo-Dionysius を譯を批判して自らもこれを譯し Pheophanes の年代記や東方宗教會議の決議、聖者傳等を譯して居る。

西洋中世にギリシア古典の知識が復活するのは十二世紀に入つてからである。但し十世紀に Amalric von Gerbert (法王 Sylvester II) の如きがあるがこれは例外と言えよう。十二世紀ヨーロッパへのギリシア文物の流入は南伊シシリーとスペインのトレドとの兩地の翻譯者達の努力に負うもの、彼等の出現は是等兩地方が中世ヨーロッパと東方との接觸點であつた事で説明される。トレドがアラビア語のラテン譯を中心としたのに對し南伊地方ではギリシア語から直接翻譯された。南伊は中世におけるギリシア勢力の根據地であつた。十二世紀シシリーのパレルモで

ノルマン王ウィルヘルム一世の下でギリシア語からのラテン譯を作つたものに Henriens Arisippus, Eugen von Palermo があり、フリートリヒ二世時代は Michael Scotus 等アラビア語からの翻譯が多いが、フリートリヒ二世の子のマンフレッドの時代は、又ギリシア語のラテン譯が盛で Bartholomäus von Messina はその宮廷でアリストテレスの *Magna Moralia* や偽アリストテレス書を譯して居る。

北方にはイギリスの Robert Grosseteste が活動し、又オランダ人 William of Moerbeke は、アリストテレスの外 *Simphikos*, *Proklos* 等のギリシア原典をラテン譯しギリシア哲學の紹介に貢献した。パレルモの學的活動はマンフレッド王の死で杜絶するが王のギリシア語寫本集の一部は法王の書庫へ移り、法王クレメンヌ四世、グレゴリウス十世ウルバヌス四世の下でメールベケの翻譯活動の素材となつた。メールベケはトーマスの協力者でトーマスのアリストテレス知識は彼の影響が大きいのと思われるが、然しフリートリヒ二世の創設したナポリ大學では早くから *Martinus* や *Petrus von Hibernia* 等がアリストテレスを講義し

て居り、同大學へ遊學したトーマスは後者のアリストテレス自然學講義を聞き既に此の時アリストテレスへの指向が決定されたとグラープマンやポイムカーは言う。

中世に傳つたギリシア古典はラテン古典に比べて言うに足りず、中世人のギリシア語知識も同様であつた。然しラテン古典も思想的にはギリシア古典の亞流であり、中世に傳つたギリシア古典の量的僅少に反比例してその思想的學問史的意義は大と言えよう。それは例えば中世のプラトニズムを見ても明かである。バーネットによればプロティノスがローマでその學派を開きプラトニズムを再興したのがその後のヨーロッパ文明の出發點であると言うが、更にアウグスティヌスによりプラトニズムは中世初期教會の御用哲學となり、又ボエティウスによつて西洋學藝の血肉となる。中世盛期シャルトル學派の哲學の基礎は、四世紀に *Chalcidius* の譯した “*Timaeus*” であり、それとボエティウスの “*De consolatione Philosophiae*” 及び數學論がシャルトル學派にビタゴラスとプラトンの思想を傳えた。ガリレオ、ケプラー、コペルニクス等近代初期の科學

者は何れもプラトンの上に立つてゐる事を自覺してゐたが、そのプラトニズムはシャルトルで保たれたのである。グロッセテスト、ベーコン等オックスフォード大學の自然科学研究の發展とシャルトルのフランス・プラトニズムとの結び付きは、いふ迄もない。

二、中世のラテン語

ラテン文學史は一般に四・五世紀で筆をおき、ラテン語がその後近代に至る迄尙多彩で豊かな作品を生み續けて居る事は案外閑却され易い。ラテン語はローマ帝國の崩壊後も新しい歴史に順應して生き續けたが、その際相當の變化を來したのは當然で中世ラテン語を古典ラテン語の墮落と片付けてはなるまい。中世ラテン語は *vernacular* の影響で古典ラテン語から益々離れようとするがその *Latinity* を維持したのは古典の傳統で、しかも中世に傳えられたラテン古典は人々の想像より遙かに豊かである。^④

④ *Peck* によれば中世で讀まれたラテン古典は次の如きもので

ある。

Terentius, Horatius, Ovidius, Lucanus, Martialis, Juvenalis, Cicero, Seneca minor, Plinius major, Quintilianus, Cornelius Nepos, Ctesar, Sallustius, Livius, Suetonius, Valerius Maximus, Petronius, Vergilius.

特にヴェルギリウスは中世では最も尊ばれた作家であつた。

中世におけるラテン語の支配力はキリスト教會に負う事勿論だが、キリスト教文學も三世紀初めまではギリシア語でローマでもキリスト教徒の用語はギリシア語であつた。

二世紀までラテン語による唯一のキリスト教作品はギリシア語の聖書を言葉だけラテン語に置き換えたものであつた。キリスト教ラテン文學の成立、ローマ教養階級のキリスト教化は *Tertullianus* の出現からと言ふ。初期キリスト教ラテン文學は中世ラテン語の出發點、その基礎であるが、キリスト教ラテン文學の成立はキリスト教と古代文化との結合、キリスト教徒によるラテン古典の受容を意味する。異教文學とキリスト教との關係は微妙でローマ帝國のコスモポリタニズムにより二世紀から衰えたラテン文學に致命傷

を與えたのはキリスト教の流布であることされ、同時に古典を保持したのもキリスト教社會就中修道院であつた。教會は元來異教文學に敵意、又は少くとも警戒心を抱いて居り、ヒエロニムスはキケロを寫本しウエルギリウスを教えた修道僧を非難し (Epist. I, XX, ad Rufinum, I, ch. XXX) 又彼自身キケロニアンである事をキリストに夢の中で叱責された話は有名である (Epist. XII, 30, ad Eustochium)。グレゴリウス大法王はウィーン司教 Desiderius が古典を教えたのを難じ、聖アントニウスはアルファンベットの使用を拒み、聖ヘネダイクトも自ら “nescius et indoctus” を誇つて居る。テリトゥリアヌスは哲學者を「智と雄辯の商人」と嘲り (De Anima, II, I) 「アテネとイェルサレム、アカデミアと教會に、何の共通性ありや」と唱えた。(De praeser., VII) 然し異教文學排撃のこつした證言は却つてヒエロニムスで最も明かに示される如くキリスト教徒が異教文學に持つた斷ち難い執着を物語るものであり、又キリスト教會の發展には實は異教文學は不可欠の必要物であつた^⑤。歴史は結局異教文學がキリスト教により絶滅さ

れず古典が教會により保持されて行つた事を示している。

⑤ 異教文學に對する強い警戒心とそれにも拘らずこれを必要とする教會は、現實においては妥協をもたらし、その理論としては artes liberales に對する Propädeutische Wertschätzung を用いた。ノルデンの言う如く此の見解は既にプラトンやストア派に見られそれがフィロンによりキリスト教の所有に移り、東方ではクレメンヌ、オリゲネス、ナツイアンのグレゴリウスに示されている。西方ではアウグスティヌスの教育理論書 “De doctrina christiana” に典型的に現れ、これをつぐカントニエの “Institutiones lectionum divinarum” (I, Praef.) で教會の確立せる見解となり以後全中世を通じて教會の代表的意見として主張せられる。従つて中世では artes と auctores とが區別され、前者は大いに奨励されながら後者は無用視又は禁止される事になる。但し Servatus Lupus の “Propter se ipsam appetenda sapientia” とらう有名な文句、オーリアックのジェルベールの “In otio, in negotio et docentur quod sciunt et addiscuntur quod nesciunt” 等にも注意されるべきである。

アウグスティヌスを初め教會教父達は古典的教養に富んだ

人々であつたが彼等の作品のラテン語は *Biblia Vulgata* を初め古典ラテン語とはかなり異つて居る。新しいキリスト教思想の表現の必要が加ふる變化をもたらししたのは當然であるが、ラテン語自體にもさうした可能性は含まれてゐた。ラテン文學黄金時代にさへ *written latin* と *spoken latin* との區別 (*lingua latina, lingua Romana*) はあつた譯だし、帝國末の遠心的傾向はラテン語の地域的差異を促進したであらう。

古代末中世初めのラテン語の悪化は當時の人々自身によく意識されてゐた所で、*Gregor von Tours* は "*Historia Francorum*" の序文で又 *Fredegarius* は彼の所謂年代記で自らそれを告白して居る。大體から言つて四世紀には未だ古典ラテン語から見て相當立派な作品が見られるが、五世紀から特に六世紀に入るとラテン語の所謂 *Entartung* が著しい。例えば四世紀の *Arsenius, Claudianus* 等と五世紀の *Sidonius Apollinaris* とを比べると後者の文章の拙劣は明かである。然し五世紀のガリアには未だ正しいラテン語を語るローマ貴族が残存して居る。アポリナリスはそ

の一人の筈である。所が六世紀後半になると *classical latin* は滅びローマ文化を維持した貴族も周囲の無智な大衆と接しそのラテン語を失つてしまふ。ツールのグレゴリウスもガリアの名門の出でありながらラテン詩が書けない。彼の同時代人フォルツナーツスは最後のラテン詩人と言われるがクオンティエの誤りが多くしかも叙事詩は書けなかつた。三四世紀流行のproz.・リトミックも六世紀には忘れられてしまふ、六世紀フレデガリウスのラテン語はバルバリ・コミックと評される。こうしたメロヴィンガ時代のラテン語の悪化は *lingue vulgare* の影響では決してなく古典ラテン語の傳統が失われ正しいラテン語を書こうと欲しながら淡い記憶を頼りアブラティフ、ジュニティフ等を出鱈目に使用した爲であつたと *Ferdinand Lab* は言つて^⑥。

⑥ 中世初めのラテン語の悪化で最も酷いのはフォネティクである。子音では *h* と *v* と混同し、母音では五短母五長母二重母音 (*ae, oe, ai*) が *o* と *e* と *u* と *i* との融合及び重母音の消失で七つに減する。長短母音に代り開閉母音が用いられ、作詩はリトミック・ダンシテによる様になりラテン詩は民衆に全

く理解されなくなる。シンタックスでもデクレンション、コン
ジューションの破壊で大きい影響を受け *proposition in-
finite* に代り *proposition conjonctionnelle* が起る。(例えば
scies quod ego sum salvator mundi) 指示代名詞は前置詞
になり接尾語が新たに發展する。言葉の消耗も甚だしくシノニ
ムはなくなりキケロ的用語に俗語が代りモルフオロギーは滅亡
する。中性詞、比較形、副詞 (*mente* と結び付いた女性形容
詞) デポーネント、受動形 (*sum* 動詞を持つた分詞)、未來
(*habeo* と不定法) が屢々用いられ、格の語尾變化に代り *de
ad* 等の前置詞が使われて來る。

ルネッサンス・カロランジヤンスは中世ラテン語史上で
もエポック・メイキングな意味を有する。

ルネッサンス・カロランジヤンスの基礎は正しいラテン
語の習得、ラテン語の體系的研究にあつた。七自由科の内
文法が最も重要視され且つその内容も極めて廣いものであ
つた。^⑦ 然しこれによるラテン語の復活は人爲的なものであ
り、これより後ラテン語はその學習に大きい努力を必要と
する *Freundsprache* に化する。即ちラテン語はラング・モ

中世におけるギリシア語とラテン語の問題(兼考)

ルトである故に正確であると言ふ事になる。當時既に曾て
ガリアに榮えたラテン文化は絶えチャールス大帝は彼のル
ネッサンスの酵母を島國イングランドに求めねばならなかつたが、インドランドアイルランドの如くラテン世界と無
縁の地に人工的に育てられたラテン文化は、(中世初期島國
の公文書類のラテン語がラテン地方のそれより餘程正確であつた) ルネッサン
ス・カロランジヤンスで確立する中世ラテン語の *artificial*
な性格を説明してはいまいか。當時の作家は學校で習うラ
テン文法に従い正しいラテン語を書いた。然し彼等のラテ
ン語には個性がないと評される。ルネッサンス・カロラン
ジヤンスの模範的作品とされる *Aeginaldus* “*Vita Karo-
li*” は成程古典ラテンのすぐれたコピーではあつたがそ
れ以外の何物でもなくアルクインの書翰も同様の *sententia-
ness* を特色とすると言ふ。

⑦チャールス大帝の言 “*In omni doctrina grammatica proce-
dit.*” 又アルクインの言 “*Grammatica est litteralis scientia,
et est custas recte loquendi et scribendi ; quae constat
natura, ratione, auctoritate, consuetudine.*” 文法は言語の

外に文字、その形式の研究も含まれ、ループス等の最も高級な古典研究も、初學者のアルファベットの勉強も文法の中に含まれた。文法の教科書としては初級用には Donatus の *ars minor* が、上級用には同人の *ars major* 又は Priscianus が用いられた。後者は特にアイルランドで流行した。その他に九世紀には多くの *artes grammaticae* が作られた。修辭學としてはアルクイン、マルチアヌス・カペラ、カッシオドロス、セウイラのイシドール等が讀まれ、上級では “*ad Hieronimum*”（キケロ前のもの）やキケロの “*de inventione*” が用いられた。七自由科全般については Martianus Capella “*De nuptiis philologiae et mercurii*” の大流行は言う迄もあらまい。尙マニエスクリプトにおける Carolingian minuscule の勝利も重視される可き問題である。

近代的意味での文學のない中世では言語の歴史は神學の歴史を追う譯で中世ラテン語史も中世神學史と大體併行する。スコラ學の發展は中世ラテン語を成熟させ、十二三世紀の北佛で中世ラテン語も亦頂點に達する。此の頃になつて初めて中世ラテン語は古典的傳統に通曉しながらしかもこれに拘束される事なく自由に自己の思想を表明し得るに

至つた。十三世紀頃哲學がトミスムスを頂點としながら又種々相異なる思想家の群を持つ如く當時のラテン作品も亦多様である。古典に深く通じ最も純粹なラテン語を書いた Johannes Saresburiensis、燃える美と高鳴る響を以て熱烈な信仰心を傳えた最高のラテン詩人 Bernhardus von Etzhan、レトルカルではないが節度あり控え目で均整の取れたトーマス・アキナスのラテン語、幼兒的ラテン語でしかも深い感動を與える Leo の “*Speculum Perfectionis*” 等キリスト教精神のラテン的表現はこゝにその頂點に達した。中世文化の特色が kirchliche Einheitskultur にあるとすれば、中世ラテン語は最も中世的な所産と言えよう。これら中世盛期のラテン語作家の中でシャルトル學派次いでオルレアン學派に屬する人々は古典を尊重し哲學より文法と言葉の純粹性を重んじ、古典ラテン語（又はそれに近い）を以て書かんとした。これに反してパリ大學では所謂論理學を重んじて言語や文學的表現の問題を輕んじた。前者は *anatores litterarum* で *autores* を重視し、後者では *artes* が支配して *autores* を無視した。Renaissance

Humanist や classical philologist は前者をルネッサンスの先驅者と讃え、モロラ學のラテン語を蔑視する。^⑧然し Mittelalterner は非古典的なモロラ學ラテン語にもしるその独自の意義を認め、トーマスの例えは “Summa contra gentiles” の如き中世ラテンの最もすぐれた成果を見んじたる。^⑨

⑧ 例えばエドワード・ノルテンは古代作家研究史にとつてはモロラ學時代は甚だしい退歩の時代だと言ふ。十一二世紀にはシャルトルが、十三世紀にはオルレアンが古典主義者の牙城となり、シャルトルには Bernardus Silvester, Johannes Saresberiensis, Peter von Blois, Hildebert de la Mais 等が、又オルレアンには Mathaeus von Verköme, Galfridus von Vinesauf 等が有名である。ノールマンリのジヨンの “Fratricius” “Metalogicus” にはクラシシムイストとシヨラステイカーとの對立を語る興味ある文章がある。

⑨ 盛期モロラ學のラテン語は Praehilichkeit を特色として居る。モロラ學者は言語を彼等の支配的な思想に役立たしめる事を第一の目標とした。モロラ學のラテン語では -as を suffix とする abstrakte Substantiva が多く用ゐられ、Verbalob-

strakta には -is が少くない。形容詞を作る時には -rus, -alis, -orius, が多い。又 hi, con 等 の praefix がよく用ゐられる。

中世ラテンはルネッサンス以來 Kirchenlatein, Mönchslatein 等と蔑視されて来た。ヘルテルは早く中世ラテンの意義を認め居るが、十八世紀初め Polykarp Leyser が中世ラテン詩を擁護した時も殆んど世人に認められなかつたらしい。中世ラテン語への評價が改まつて来るのは十九世紀の歴史學、言語學研究の後である。中世ラテン語學 mittelalterliche Philologie の創立期は確定出来ぬが、その創設者と目される一人 J. Traube がミュンヘン大學で初めて中世ラテン語學を講じたのは一八八八年であり、W. Meyer は一八九五—六年にゲッティンゲン大學で開講したと言ふ。

三、中世ラテン語と vernaculär

ラテン語は歴史上ローマ時代と中世との二回にわたり、世界語になつたと言われる。然し中世に於けるラテン語の世界性には重大な弱點がある。中世ラテンは「煖爐の、家

庭の、市場の、戦場の言葉でなく教育の、文化の言葉」(テ
イラー)であり「教會、國家、文學の言葉」(Feierlichkeit
と geheimes Dasein の言葉)(ヘルマン)で日常生活の、
民衆の言葉ではなかつた。中世人が日常親しく用いる言
葉、一般民衆の言葉には vernacular がある。

中世ラテン語の知識は大體僧侶階級に限られ、彼等の間
では中世ラテンはラング・パールとしても存在した譯だ。

然し彼等にとつてもラテン語の習得は我々の想像以上に困
難であり vernacular への執着は随分強かつたらしい。⁽¹⁰⁾無學

な下級僧侶は勿論有識の高僧さえ vernacular の誘惑に
抗し切れぬ場合があつた。僧侶達の無學——それはラテン
語知識の不足に外ならぬが——に就いては中世全體を通じ
て教會當局又は國王等から警告が發せられている。教會
は教會又は修道院においてラテン語の使用を原則的に命
令しながら現實における vernacular の力は認めざるを得
なかつたらう。ラテン語と vernacular との bilingual
worlds も傳わつてゐる。

⑩ St. Aehed of Rivaulx は十二世紀の學者であるが、彼の弟

子で師の傳記を書いた Walter Daniel によれば「アェルレッ
ドは臨終に際して "hasten ! hasten" と言ひ、又キリストの
御名を英語で附け加えたと言う。又ベーコンが當時最大の説教
者だと賞讃したドイツのフランシスコ派の學者 Berthold of
Kegensburg はラテン語よりも母國語たるドイツ語を好んで話
し、修道僧への説教にもドイツ語を使つたと言う。又十四世の
スウェーデンの St. Bridget は彼女の啓示オラショを残しているが、こ
れは元來スウェーデン語で天より彼女に傳えられたもので、そ
の後彼女の懺悔聽聞僧によつてラテン語に譯されたものだと言
う。St. Gallen の Ekkehard IV によると當時ラテン語の
教師は生徒にラテン語を教えるのに、先ずドイツ語で他人と話
す場合を考へて見てその言葉を同じ順序でラテン語に移せばよ
いと教えたと言う。チャールズ大帝が capitulare で僧侶の無
智を非難しているのはよく知られているが、九世紀末に英王ア
ルフレッド大王も英國の教會にはあり餘る程の書物がありなが
ら又神に仕える多くの人々が居りながら彼等自身の言葉で書か
れていないため理解され得ないと述べて居る。アンセルムの女
人の修道院長 Guibert of Nogent の自叙傳によれば Lyon の
司教區の代表者達が司教選舉の問題で法王に謁見のため一一〇

六年に Langres へ赴いた時、法王のラテン語の質問に一同答
 えが出来ずギヘルトが代つて返事をしたと言ふ。「何故なれば
 法王との相談は vernacular でなくラテン語で行われたから。」
 ギヘルトは又法王ウルマン二世の學識を讃えるのに次の如き文
 句を使つて居る。「彼は辯舌さわやかな辯護人がその母國語で
 話すに劣らずラテン語に通じている。」惟かな學僧を除いて一
 般僧侶の無學はよく知られてゐる所である。アマーンのピータ
 ーは、僧侶でラテン語の一句も讀めずこゝした無學の僧がどう
 して他人のために祈り得るかと慨いてゐる。十二三世紀はヨー
 ロッパの學藝の復興時代であるが、Giraldus Cambrensis
 (1147—1220) の “Gamma Iocostastion” には僧侶のラテン
 語知識の不足にしろつ數々の興味ある挿話が載つてゐる。例え
 ばある僧侶は mulier Cananea にしろつて説教した時 Cananea
 と Canina とを混同して彼女は半分犬で半分娘であつたと説
 した。又ある僧は Mass Preface の最初の文句 aequum et
 salutare をは equus salutaris と間違えて「犬が跳んだ」と譯
 した。又ある僧侶は in diebus illis の diebus が行の分れ
 目にあつて die と bus とに分れてゐたため dussillis とは何
 の事であるかと Johannes Cornubiensis に質問したため彼

中世におけるギリミア語とラテン語の問題(兼岩)

はその無智にあきれて僧侶達を戒めたと傳えられる。特に中世
 末に近附くとラテン語より vernacular の傾向が教會や修
 道院でも明かになつて來る。知名の高僧でさえ相互の通信に
 vernacular を使ひ、修道院の business documents が ver-
 nacular で保存されるようになる。Mondaye の Prement-
 nés 派の修道院ではフランス語で書かれた記録文書は既に十
 三世紀から始まり、十四世紀には極めて多し。十四世紀には
 vernacular による僧侶達の通信はますます増加し、十五世紀
 カンタベリーのクライスト・チャーチのある書翰集八十五通の
 中三十七通が僧侶同志の間のものであるが、その中で一通は英
 語とラテン語と半々、二十八通が英語、八通がラテン語であつ
 たと言ふ。(此の問題にしろつは G. G. Coulton; Europe's
 apprenticeship を参照されたい)。

①例えばラテン語と O. E. とのグロッサリーの中で最古のもの
 は八世紀であり、又ラテン語と Althochdeutsch とのそれには
 所謂 Vocabularius D. Galli が八世紀のサン・ガレン修道
 院の寫本の中にある。

中世の vernacular は單にラング・パーレとしてのみで
 なく、ラング・エクリットとしても豊かな作品を残してゐる

る。十二世紀フランスの *Troubadours*, *Trouvers* 又ド
イツの *Minnesinger* は勿論、イギリスの *Beowulf* や *Old*
English chronicle 又アルフレッド大王の奨励によるラテ
ン語作品の英譯、又東部フランスにおける *Hildebrands-*
lied 等教會の壓迫を受けながらも *vernacular* 文學の源は
かなり古くまで遡られている。そこでクールトンの如きは
中世の言語の世界をラテン語と *vernacular* との *bilingual*
system と考え、此の *bilinguality* が中世思想家の感覺の
廣々と度合、表現の豊さを損つたと語り。同一人が日常の
概念は *vernacular*、職業上の思想はラテン語と分けるのは
思想の微妙な展開に不利で、こうした *ordinary life* と *aca-*
demic life との言語上の區別は、世界思想の *artificiality*,
insensibility を生み又中世に著しい理論と實際との溝も亦
これに明寫されている。然らば中世哲學も亦その影響を受
けスコラ學はその用語たる中世ラテン語に制約されたと言
えようか。 *vernacular* による中世文學が人間中心主義的な
作品を多く生んでいる事を思えばそれも一理あると言えよ
うが、中世ラテン作品にも有名な *Carmina Burana* の如

きがある事を思うべきである。

中世ラテン語は本来 *Kirchenlatein* である。ローマ教會
とラテン語との結合は西洋中世がラテン的ヨーロッパを舞
台とした以上自然の成行きと考えられるが、然し世界語た
るラテン語がローマ教會の普遍性をもたらすのに役立つた
事は否めまい。元來ローマ帝國で成立した *Reichskirche*
はローマ帝國の崩壊と運命を共にし中世に入るとゲルマン
民族の *Landeskirche* が出来る。チャールス大帝治下のフ
ランクのガリア教會はその完成形態である。これらの *Land-*
eskirche は民族的色彩の強いもので教會の自主性は族長
或は國王により吸收されている。中世後半における *Uni-*
versalkirche としてのローマ教會はこうした *Landeskirche*
の傾向を抑壓する事により初めて成立したものである。
Landeskirche においては禮拜に *vernacular* が用いられ
た。ウルフィラの聖書ゴート語譯は周知の通りである。民
族的パルティキュラリスムスを打破して普遍性を要求する
ローマ教會、民族や國家に對して己れの獨立を主張するロ
ーマ教會が用語としてラテン語を用いた事は必然的であつ

たと思われる。

中世教會は Anstaltskirche である。そこにおいては、例えば七つのサクラメントには恩寵が満ちて居りこれに與つて初めて人は救いを得るとされた。サクラメントは神的なものゝ人間化物質化により被造物への神性の傳達を引き延ばし繼續し繰返すものに外ならぬ。かくしてサクラメントに用いられる言葉そのものに神祕的な宗教力が宿ると信ぜられるに至る。救いの力を獨占すべき中世社會にとつて、民衆の用語である vernacular でなくラテン語を採用したのは此の點から見ても好都合ではなかつたか。ローマ教會が聖書の vernacular 譯に反對し宗教改革が初めて聖書の獨譯英譯等をもたらしたのもうなすけよう。

參考文獻

- 中世ラテン語學全般に關するは L. Traube; *Vorlesungen und Abhandlungen*. 5 Bde. はやばり 第一に讀ませよう。
彼の第十の P. Lehmann が編輯した “*Quellen und Untersuchungen zur lateinischen Philologie des Mittelalters*” にも好論文がある。その他 S. Hellmann, F. Blatt, G. C.

中世におけるギリシヤ語とラテン語の問題(兼岩)

Mierow 等。語彙には Du Cange は言う迄もなく、簡單なものは Baxter and Johnson がある。文法では C. H. Beeson, K. Strecker, Nün 等。中世ラテン文學史では M. Manitius の大著の外に P. de Labriolle, F. A. Wright and F. A. Sinclair, E. J. E. Raby, A. Ebert 等がある。中世のギリシヤ語に關するまとまつた研究を参照出来なかつたのは遺憾である。これは主として E. Norden, H. F. Peck, J. E. Sandys 等の古典語學史によつた。中世言語の問題には M. Grubmann, C. Baemker, E. Gilson, DeWulf 等の中世哲學史研究も缺か得ない。又中世教會史に關するは E. Troeltsch, H. v. Schubert, A. Hauck, A. Werninghoff, 等を参照した。その他 H. O. Taylor, G. G. Coulton, H. L. W. Laistner, F. Lotz, G. Dawson, H. Rashdall, M. Rogen, R. L. Poole, J. Burnette 等。作品とそれと接するものは MGH, Migne; Patrologiae, *Corpus scriptorum ecclesiasticarum latinorum* (CSEL), *Corpus glossariorum latinorum* (CGL) の大體に包含せらる。